

なぜ私が「生体手術演習」をする 軍医になったのか



● 東京保険医協会

湯浅 謙

ゆあさ けん

1916年埼玉生まれ。41年東京慈恵会医科大学卒業。駒込病院勤務を経て軍医中尉任命。45年国民党軍第2戦区軍医徴用。51年捕虜として収容所に。52年太原監獄に戦犯拘置。56年帰国。57年東京慈恵会医科大勤務を経て開業。

- ◆ かつての中国に対する15年戦争について、「侵略戦争」と言われてはいるものの、実態を伝えない、真実が知られていない。
- ◆ 「一体、あの恐ろしい戦争が、なぜ起こってしまったのか」、特に戦後の民主主義の時代に育った方々から、疑問が投げかけられている。
- ◆ 「現在の状況は、戦前と似ている」との思いを禁じ得ない。
- ◆ そこで、平均的人間が駆り出され、「気がついたら戦争だった」とならないために、私の実際の体験を通して、現在と未来への教訓にしていきたい。

1941年の3月、東京慈恵会医科大学を出た。開業医だった父の後を継ぎ、病に苦しむ人々を癒す資格を得た私は、「やがては無医村の赴こう」と考えていた。ところが駒込病院勤務後、その年の暮れに短期現役軍医になってしまった。翌年の2月1日には、中国山西省南部の潞安陸軍病院に赴任した。そこで伝染病棟診療と病理検査室管理および衛生教育に就いていた。

あの当時の気持ちはどうだったか。

得意満々だった。あの戦争を「侵略」とは考えずに、「大東亜戦争だ、アジアを開放して、しかも、日本が指導して中国人民を独立させるんだ。それに反対する中国人もいるから、これは排除しなくてはならん」と、盲信していた。駅に多くの裸足の子どもたちがいる。「哀れな民よ」、ふと人間的な気持ちも起こる。

しかし、軍服を着て将校になると、「だから戦争は勝たねばならない」と、人間は変わってしまう。

また、将校を中心として10人ほどの軍医と看護婦、下士官を入れて全員100人ぐらいで、常時100人ぐらいの傷病兵を収容していた。「俺は正しいことをやっているんだ、大和民族は優秀なんだ、天皇の始めた戦争には必ず勝つんだ」と。そして、私が歩き出すと、中国人は道をあける。それを堂々と見据えた。それに、病院には、看護婦や衛生兵もいる。なにか人間が偉くなったような気持ちで得意になっていた。給料も駒込病院勤務時に比べ、はるかに優ってもいた。軍医の職と地位を得意に考え、傲慢に振る舞うようになっていった。



赴任して1カ月半経った3月半ば、薄ら寒い日の出来事は、いまでも忘れることができない。「ちょっとお前ら下がっておれ」と、将校食堂から雑役夫を下げさせた病院長から、「今日は1時から手術演習をやるから」と言い渡された。

「手術演習」は、師団隊附軍医が前線で緊急手術ができるように、技術習得のために軍が計画的に実施していた。日本軍は、国内の医師を根こそぎ動員したものの、外科軍医に不足していた。第一線部隊の士気に関わる、と考えた軍の意向でもあった。広大な中国大陸で泥沼に陥っており、傷病兵を後方護送をせずに、第一線の前線で緊急手術できる外科技術を必要としていた。

「材料」は、生身の健康な中国人捕虜囚人だった。憲兵隊や警備隊に「要求」して、連れてきていたのだった。

学生時代、戦地から帰ってきた先輩軍医から、中国へ赴くと「生体実験やる」とは聞いていた。そのときは「薄気味悪い」と思いながら聞いていたが、「非人道的行為で許せない」とは考えはしなかった。目前になると動揺した。軍医である以上は避けられない。しかし、「今日は生きた人間を、そのままやらなくてはいけない」。確かに駒込病院では解剖はしていたが。ささやかな抵抗として、回診にかこつけて10分ほど遅れて行った。だが、「皆の前で、臆病な振る舞いをするな」と、自分を励ましながら。

手術台が2台ある解剖室には、師団軍医部長、病院長、指導の病院外科軍医2人、援助

の病院軍医3、4人、衛生兵数名に加えて、教育参加の隊付軍医7、8人らが揃っていて、談笑していた。看護婦2名が切断刀やメス、鋏、鉗子などを準備している。チャラチャラと乾いた金属音が12坪ほどの解剖室に響く。囲まれるように、両手を縛られた中国人2人が、すでに立っていた。1人は、背が高く頬が広くガッチリした体格の若い男性だった。落ち着いた様子で下を向いていた。もう1人は年配の農民風で、縛られた両手を前に突き出し「アイヤー、アイヤー」と悲鳴をあげながら、室内を見回していた。

肩を張って見ていると、病院長がタバコを捕虜に渡し「始めよう」と命令した。さすがに解剖室はシーンとなった。

背の高い男性は、兵に促されるまま手術台に臥した。年配の農民風の男性は、兵が促しても手で押しやっても、後ずさりする。それも私の目の前で、押されては後ずさりしていた。ただ見ていて、「意気地なし」と思われたくない。意を決して、両手で突きだした。しかも足に力を入れて、取っ組み合って転んでみともないことにならないようにして。それで農民風の男性は諦めたように、頭をうなだれ手術台に向かった。「やった！将校の名誉を保った！」。瞬間の出来事だった。が、はっきり覚えている。それでも手術台には乗ろうとしない。今度は看護婦が「麻酔薬給不痛、睡覺」(麻酔をするから痛くない、寝なさい)と言った。やっと、うなずきながら手術台に臥した。

ここで部隊軍医によって腰椎麻酔から全身麻酔に入ろうとした。その時、私は「あっ、消毒は？」と発した。すると先任の軍医から

「どうせ、殺すんだから」と、笑い返された。まず、虫垂切除。病的でないため腫脹が見られずに探すのに困難し、3回も腹壁を切開した。腸管縫合、四肢切断から気管切開とすすんだ。病院外科軍医の指導のもと私たちは介助任務だったが、「興味に駆られて」、右前腕切術を練習した。

1時間半ほどで「手術演習」は終了した。部隊の軍医と看護婦たちは引き上げた。後始末は、私たち新米軍医と衛生兵で行った。農民風の男性は、すでに絶命していた。「材料」の練習体は、衛生兵が運び出し、解剖室から少し離れたところに掘られた穴に放り込んだ。その穴の近くには、これまでも何回も繰り返されてきた「手術演習」の練習体が、埋められていた。背の高い男性は、まだ最期の呼吸をしていた。さすがに呼吸しているのを穴へ放り込むのは気が引けるのか、病院長が心臓内注射を試みた。いったん血液を吸い上げて針が心臓に達しているか確認したあと、空気を注入した。が、呼吸は停止しない。私は、衛生兵に教えられて、全身麻酔に使ったクロールエチール液5ccを静脈に注入し始めたところ、半分ほどで、すぐに呼吸が停止した。

これが、私が家を離れてわずか1カ月半後に最初に犯した戦争犯罪なのだ。この2人は、なにをした、というのか？「否、憲兵隊から貰い受けただけだ。なにも分らぬ」。どこの出身なのか？ 家族は？ 姓名は？ すべて、なにも知らない。それでも、この2人の動作や顔、表情は、いまでも目に焼き付いて消えない。

私はこの病院で6回にわたり、10人の方の「手術演習」に関与した。初めは恐る恐る。2

回目は大胆に。3回目からは自ら進んで。

あるときは、初年時衛生兵教育には「実物がよい。度胸をつけるのにもよい」と考え、私自身の発案で、憲兵隊から1人を貰い受けて、胸腹部を切開し内蔵を一同に供覧したこともある。備品として解剖模型や図譜もあったのに。また、病院長の指示で「手術演習」後、脳の皮質を剥ぎ取って、アルコール瓶詰めにして内地に送ったこともある。製薬会社で皮質ホルモン研究に使う、とのことであった。



この「手術演習」は、潞安陸軍病院だけで実施されていたわけではない。

1942年春、私たち山西省各地の陸軍病院や野戦病院から軍医約40人が、太原市の第一軍司令部に集められたことがあった。内科外科の講義終了後、軍医部長が「今日はいいことをさせてやる」と切り出し、一同は太原監獄に集合させられた。門の内側には、目隠しされ後ろ手に縛られた男2人が、しゃがみ込まされている。出てきた看守が「やりますか」と声をかけて、拳銃2発ずつ、2人の腹に発砲した。悲鳴をあげる男たちを、私たち10人で1人ずつ担いで、別室に運び「手術演習」を始めた。開始のとき、「弾丸を抜くまでは生かしておくように」との軍医部長の声が聞こえた。麻酔はなく、酸素吸入もなく強心剤も止血剤もなく、悶絶のうちに間もなく絶命した。私たちの「手術演習」中に、さらに4発の発射音が鳴り響いた。さらに2人を使って、20人の軍医が「手術演習」を開始したのだ。

「手術演習」は、また、山西省だけに留まることはなかった。

敗戦前のいつのことだったか、私が庶務主任に就いていたころ、北支方面軍の軍医部から機密文書が届いた。「戦況は思わしくない。熱心に手術演習をやるように」という内容の命令だった。私は躊躇なく病院長に意見具申した。従来、春と秋に年2回毎回2人ずつ「手術演習」していたのを、年6回実施するよう計画して方面軍軍医部に送った。幸いにも軍隊の南方移動のために、計画は実施されなかった。



この命令で、北支にあるすべての軍病院で「手術演習」が実施されていたことを知った。関与した軍医、衛生兵、看護婦は、おそらく数千人にのぼることだろう。だが、多くがこの事実を語ろうとはしない。自らの行為を恥じてか？あるいは恐れてなのか？あえて避けているのか？口にはしない。

否、「意外」と思われるだろうが、「忘れて思い出さない」のである。

「仕方がなかった」、「当時は命令されて」、「皆がやっていた」、「各地でやっていた」、「だから、たいしたことではなかった」。全く罪の意識に悩まされずに実行したために、「犯した」という印象が薄い。私も敗戦後に中国で、人民解放軍の捕虜収容所で、やっと犯行を思い出した。

自分自身を「悪人」と認めることは辛い試練だった。収容中に、自殺を図った者もいた。わたしが自分自身の行った行為を心から認識できるようになったのは、私が「生体手術演習」して殺したその方の母親からの手紙を読まされたのがきっかけだった。「申し訳なかつ

た」、「いままでの反省の仕方は軽かった」と己を責めた。敗戦から11年過ぎて、自分がなにをやってきたのか、やっと気づいた。

自分の過去を反省するのは、血を吐く思いだった。現在の日本では、侵略戦争の反省が足りない。戦争体験者は過去の罪に気づかず、戦後の人は、民主主義で育って、戦争の人権無視非合理性を想像もつかない。政府は被害国に心からの謝罪はせず、戦争の事実を覆い隠し、美化している。

この状態は危険と強く訴えたい。だから、いま種々の戦争法案が制定されようとし、自衛隊の海外派遣参戦の事態になっても、多くの国民は戦争の実感が湧かないでいる。私は、自分の恥、日本の恥を暴露するのは辛いけれど、あえて加害の戦争体験の語り部として努力していく決意でいる。

参考文献

- 1)『15年戦争と日本の医学医療研究会会誌』
(第2巻第2号 2002年5月)
- 2)吉開那津子著『増補新版 消せない記憶』
(日中出版 1996年9月)

昨年11月、自衛艦初海外“派兵”から2日後、東京都内で開かれた「15年戦争と日本の医学医療研究会」第6回研究会での湯浅謙先生記念講演を、「月刊保団連」編集担当の江野康雄の文責でまとめ、湯浅先生が補筆した。